１人１台端末の効果的な活用に向けた取組

越前市武生第一中学校

１　はじめに

昨年度は、「課題や活動の質を高め、深い学びにつなげる授業づくり」を目指して授業改善に取り組んできた。その結果、話し合う活動を通して「自分の考えを深め、広げること」、「自分の考えをもとに新しいものをつくり出すこと」については、生徒に好ましい変容が見られた。ただし、課題が与えられ、解決の道筋が示されていれば、真面目に取り組み成果を残すが、「自分で考え、計画し、わかるまで粘り強く取り組む」ことに関しては、十分とは言えないという課題が残った。

そこで、今年度は課題の精選や取り組み方の見直しを通して他律から自律に向かう生徒を育て、授業形態を工夫して深い学びの達成を目指すこととした。

２　これまでの実践

（１）学習の個別最適化

①デジタルドリルによる基礎学力の定着

生徒一人一人に応じた活動や課題に取り組めるようタブレット端末を活用した自学自習の環境を整え、学びポケットやアプリのデジタルドリル教材に取り組む。生徒が自分で必要なものを必要な分だけ選択できるため、主体性と学習を調整する能力を育むことができた。

②デジタル教科書の利用

現在、理科と英語の生徒用デジタル教科書がタブレット端末で利用できる。動画や音声、などの各種デジタル教材と連携されており、生徒の理解をより深めることができる。たとえば、理科では実験手順や準備物を文章と図表を組み合わせて説明する必要があったが、動画を利用することでよりスムーズに理解できるようになった。地殻変動や天体など実際に観察が難しい現象はアニメーションを参考にすることができる。読み書きに不自由さを感じている場合など、必要に応じてふりがなを表示させたり、音声を読み上げさせたりと生徒の多様性に対してもきめ細かな対応ができた。

（２）授業形態の工夫

①ペア学習を中心として

以前より本校の授業は、学習課題を把握し、解決に向けて自分の考えをもつことから始まる。続いてペア学習で意見の交換や比較を行い、構築した考えをもとにクラスの全体学習に主体的に取り組むという流れで進めている。タブレット端末を使うペア学習では、グループや学級全体

での話し合いの場面に比べて自分の考えを表現しやすくなり、日本語の読み書きが不自由な生徒も翻訳機能を使って話し合いに参加できる機会が増えた。これにより、生徒一人一人の活動量を確保することができ、主体性を発揮する場面も増えた。

②全員が深い学びに到達する授業

クラスの全体学習を深い学びの場と考え、1時間の授業内に設定する。このとき、ペア学習から上がってきた意見から類似のものや対立するものを抽出する。教師は学びの調整役を務め、深い学びにつながる発問を投げかけねらいに迫る思考を促す。このとき、授業支援アプリを利用すると、意見交換の時間短縮ができ、結果的により多くの他者の考えに触れることができるようになり、個と集団の思考のやりとりを深化させることができた。

全体学習の後でもう一度自分の学びを見つめ、深めた学びを自分のものにするために振り返りの時間をとる。「わかったこと、できたこと」（再確認の気づき）、「新たな気づき、さらに調べたいこと」（深い学びの気づき）などをまとめていくなかで、自分の考えが再構築され、新しい課題に向かう「主体的な学び」につながっていく。タブレット端末なら自分の思考ブラッシュアップされていく過程を残すことが容易であるため、学びの調整にも役立てることができた。

3　これからの取り組み

（1）ポートフォリオとしての利用

タブレットの活用で、生徒一人一人の学習状況をリアルタイムに確認でき、また長期に渡りデータとして蓄積することができる。これは生徒が自分の学びを振り返って足りない部分を補うことができるという利点を持つが、同時に生徒の変容を見取ることができる評価材料として、指導者にとっても大いに役立っている。従来では記録に残すことが難しかった実習の様子や、活動中に取り組む様子なども動画として保存していきたい。

（2）デジタルシティズンシップの育成

タブレットの運用が進むにつれ様々なトラブルも生まれる。危険を回避するため、「してはならないルール」を設定して守らせる指導が中心であった「情報モラル教育」では、これからのデジタル社会への対応は十分とは言えなくなってきた。危険について教えるだけでなく、ＩＣＴの善悪両面を知った上で、うまく使っていこうとするデジタルシティズンシップの考え方を指導し、よりよい社会を構成する生徒を育てていく必要がある。